

キリシタン信仰を求めた「島原の乱」

幕府はその後、鎖国体制へ!!

江戸時代初期の寛永14年(1637)10月25日天草史郎による「島原の乱」は、日本の歴史上最大規模の一揆。幕末以前では最後の本格的内戦である。島原におけるキリスト教再興を目的とした一揆だった。天草史郎は全国の信者たちに蜂起を呼び掛けるか、それとも外国に援軍を頼むことも選択肢の一つだった。それゆえ一地域の反乱ではなく全国各地に波及する恐れがあった。幕府にとっては、屋台骨を揺るがしかねない状況だった。

幕府は原城に籠城した天草史郎たち一揆軍を討つため大軍を派遣するが.....地の利がある原城をなかなか攻め落とすことはできず.....やっと、寛永15年2月28日に終結したと言われている。

島原の乱の背景

島原の乱は、[松倉勝家](#)が領する[島原藩](#)のある[肥前島原半島](#)と、[寺沢堅高](#)が領する[唐津藩](#)の飛地・[肥後天草諸島](#)の領民が、百姓の酷使や過重な年貢負担に窮し、これに藩による[キリシタン](#)（[カトリック](#)信徒）の迫害、更に[飢饉](#)の被害まで加わり、両藩に対して起こした反乱である。慶長19年に[大和五条](#)から[松倉重政](#)が入封し、重政は[江戸城](#)改築の公儀普請役を受けたり、独自に[ルソン島](#)遠征を計画し先遣隊を派遣したり、[島原城](#)を新築したりしたが、そのために領民から年貢を過重に取り立てた。また厳しいキリシタン弾圧も開始、年貢を納められない農民や改宗を拒んだキリシタンに対し拷問・処刑を行ったことが[オランダ商館長ニコラス・クーケバツケル](#)や[ポルトガル](#)船長の記録に残っている^[6]。次代の[松倉勝家](#)も重政の政治姿勢を継承し過酷な取り立てを行った。

過酷な取立てに耐えかねた島原の領民は、武士身分から百姓身分に転じて地域の指導的な立場に立っていた旧有馬氏の家臣の下に組織化（この組織化自体を一揆と呼ぶ）、密かに反乱計画を立てていた。肥後天草でも小西行長・[佐々成政](#)・[加藤忠広](#)の改易により大量に発生していた浪人を中心にして一揆が組織されていた。島原の乱の首謀者たちは[湯島](#)（談合島）において会談を行い、[キリシタン](#)の間で[カリスマ](#)的な人気を得ていた当時16歳の少年[天草四郎](#)（本名：益田四郎時貞、天草は旧来天草の領主だった[豪族](#)の名）を一揆軍の総大将とし決起することを決めた^[6]。寛永14年10月25日（1637年12月11日）、有馬村のキリシタンが中心となって代官所に強談に赴き[代官](#)・[林兵左衛門](#)を殺害^[7]、ここに島原の乱が勃発する。

戦いの推移

幕府は板倉重正を派遣して鎮圧に乗り出す

*一揆軍 37,000 は三方を海に囲まれた「原城」に籠城する

*政府軍は二度の総攻撃を行うが、ことごとく敗走させられてしまう。そのため幕府は老中松平信綱の派遣を決定した。最初に派遣された板倉重正はこれを知り、功を奪われることを恐れて

信綱の到着する前に再度総攻撃を行うが、策もなく無謀な突撃で 4000 人の損害を出し、自身も鉄砲に当たりあえなく戦死してしまう。

*一揆軍は城外へ出る者を取り締まったり、外国の船がきて助けしてくれると説明し、士気を鼓舞していた。しかし、信仰を認めてほしいという願いは、外国の助けを借りることとは違うのではないのか?.....このことは一揆軍の結束を崩す基になったのではないか。

*松平信綱の軍は西国諸侯の応援を得て 12 万に膨れ上がっていた。

強行か懐柔か、松平信綱は作戦をめぐらした

*トンネルを掘って城内へ甲賀忍者を送りこみ城内を調べた結果、兵糧が残り少ないことをつかみ兵糧攻めに作戦を切り替えた。

*ポルトガルの軍艦による海からの艦砲射撃を行う、大きな損害を与えることはなかったが、外国の助けは望めないことを示し、一揆軍の士気をそぐ効果があった。

*キリシタン信仰は許すことはできない、あちこちで立てこもられたら手に負えなくなる。結果、強硬策を決断する。

*しかし、今後キリシタンによる蜂起が起きないためには、殺さずに無様な姿を見せることだと考え、天草史郎を生け捕りにすることを考えた。

*2 月 28 日総攻撃を決めるが、佐賀藩の抜け駆けにより前日に総攻撃が開始される。兵糧攻めの効果もあり、かつ圧倒的な数の攻撃により原城は落城し、天草史郎は討ちとられた。

幕府軍勝利の結果どうなったか

*一揆軍は全滅、幕府軍も 10,000 人ほどが戦死した。

*農民が激減し農業がすたれてしまった ⇒ 民の奪い合いだった

*一揆をおこされてしまった領主にも罰を与えた ⇒ 島原藩主の松倉勝家は、領民の生活が成り立たないほどの過酷な年貢の取り立てによって一揆を招いたとして責任を問われて改易処分となり後に斬首となった。江戸時代に大名が切腹ではなく斬首とされたのは、この 1 件のみである。同様に天草を領有していた寺沢堅高も責任を問われ、天草の領地を没収された。後に寺沢堅高は精神異常をきたして自害し、寺沢家は断絶となった。また、軍紀を破って抜け駆けをした佐賀藩主鍋島勝茂も、半年にわたる閉門という処罰を受けた。重昌の嫡子である板倉重矩も、同じく抜け駆けを行ったことと父親の戦死の責任を問われ、一年もの謹慎処分を受けている。

一揆後の天草

天草は幕府直轄領（いわゆる天領）となり、鈴木重成が初代の代官となった。重成は禅の教理思想こそがキリシタン信仰に拮抗できると考え、曹洞宗の僧となっていた兄の鈴木正三を天草に招き、住民の教化に努めた。一方、大矢野島など住民がほとんど戦没して無人地帯と化した地域には、周辺の諸藩から移住者を募り、復興に尽力した。天草の貧しさの原因が過大な石高の算定にあることを見抜いた重成は検地をやり直し、石高の算定を半分の 21,000 石にするよう幕府に対して何度も訴えた。しかし、幕府は前例がないとしてこれを拒絶した。そのため、重成は承応 2 年（1653 年）に江戸の自邸で石高半減の願書を残して切腹し、幕府に抗議した。幕府はこの事態に驚愕して重成の死因を病死と発表し、養子の重辰（正三の子）を 2 代目の代

官に任命した。この事実はやがて天草の領民にも伝わり、領民は皆号泣したと伝えられている。現在も鈴木重成を奉った[鈴木神社](#)が存在し、天草の人々の信仰を集めている。重辰もまた石高半減を幕府に再三訴えたため、[万治2年](#)（[1659年](#)）に幕府はようやくこれを認めた。

一年後にはポルトガル船の寄港も認めず再び「鎖国」へつながって行く。鎖国は一度だけのものではなく、その歴史は以下のようなようだった。

1616 明朝だけを長崎・平戸に限り認めた

1633 第一次鎖国令

1634 第二次鎖国令 長崎に出島の建設を始める

1635 第三次鎖国令 中国・オランダのみ長崎を認めた

1636 第四次鎖国令 貿易関係のポルトガル人をマカオへ追放、それ以外の人を出島へ移す

1637 ~ 1638 島原の乱

1638 第五次鎖国令 ポルトガル船の入港禁止

*信者には天草史郎とは違う道を選んだキリシタンもいた、現在も「鈴木さま」という民間信仰の石の祠が多く残っている。

NHK「英雄たちの選択」・ウィキペディアより